

原 著

活動期潰瘍性大腸炎に対する顆粒球吸着療法の治療成績

鈴木 紳一郎¹⁾, 田村 功¹⁾, 深野 史靖¹⁾, 熊切 寛¹⁾,
分部 敏¹⁾, 川本 昌和¹⁾, 片山 雄三¹⁾, 五代 天偉¹⁾,
安藤 耕平¹⁾, 小泉 博義¹⁾, 高橋 大介²⁾, 藤田 裕次²⁾,
松田 玲圭²⁾, 所 知加子²⁾

¹⁾ 財団法人同友会藤沢湘南台病院外科

²⁾ 財団法人同友会藤沢湘南台病院内科

要 旨：2001年9月から2005年4月までの間に活動期潰瘍性大腸炎に対する緩解導入療法として顆粒球吸着療法（Granulocytapheresis 以下 GCAP と略）を施行した51例（再施行例9名を含むため患者数は42名）、男性27例、女性24例を対象として、その有効性を検討した。臨床活動指数 Clinical Activity Index (CAI) の GCAP 前後における平均値は9.6→3.4 ($P < 0.001$) と有意に低下した。緩解導入率 68.6% (35/51)、改善率13.7% (7/51)、不変率17.6% (9/51) であった。また、治療による副作用は軽度の発熱1例、吐き気1例、頭痛1例がみられた。治療前よりステロイド剤を投与されていた9例のうち7例で減量可能であった。GCAP を積極的に導入することでステロイド剤投与の回避、減量ができ、ステロイド剤による副作用が予防できる可能性があると考えられた。また、QOL 向上の面からも有用であると推察された。

Key words: 潰瘍性大腸炎 (Ulcerative Colitis), 顆粒球吸着療法 (Granulocytapheresis:GCAP), ステロイド剤